

第37回『城戸賞』応募作品

『(RAIKOH)  
妖魔討伐記』

脚本・小島 剛人

『RAIKOH』 妖魔討伐記』あらすじ

時は平安。京の都では『邪鬼』と呼ばれる妖魔が跋扈していた。妖魔討伐隊を率いる源氏の若き武将・源頼光は、盟友の藤原保昌（保子）、家臣の渡辺綱と共に都の治安を守るため『邪鬼』と戦っていた。都を守る頼光は、しかし自分たちが貴族の「飼い犬」に過ぎないことを不満に思い、権力者・藤原兼家に平伏する父満仲に対し、齒がゆく思っていた。

そして、『邪鬼』たちの首領酒呑童子がついに暗躍を始める。都でやんごとなき姫君が消える事件が発生し、池田中納言の娘夕子にも、魔の手が迫っていた。

兼家の命で、池田中納言邸の警護をすることになった頼光たちは、酒呑童子の配下たちの襲撃を受ける。戦いのなかで、保昌は盗賊として処刑された弟の保輔（袴垂）と再会する。袴垂は酒呑童子の配下として甦ったのだった。保輔の死によって、家名断絶を案じた姉の保子は男として生きることを選び、「保昌」として生きる決意をしたのだった。袴垂の出現が、保昌の心を揺さぶる。

酒呑童子の愛妾茨木童子の笛を手に入れた頼光たちを、酒呑童子一派が再度襲撃する。かろうじて酒呑童子に勝つ頼光だったが、父満仲が死んでしまう。

酒呑童子を撃退した頼光の評判を恐れた兼家は、頼光を関東へ下向させることにする。そして、保昌は帝に見初められ、「保子」として内裏へ入内することが決まる。

関東への下向前夜、頼光と保子は結ばれる。翌日、頼光は綱、そして安倍晴明の愛弟子碓井惟光と共に関東へ向けて旅立った。

旅の途中、頼光たちは足柄峠で坂田金時という田舎侍と出会い、その母八重桐の願いを受け、鎮守の森を跋扈する妖魔土蜘蛛を退

治する。頼光と家臣たちは絆を強め、金時も旅に同行することになる。

その頃、都では傷の癒えた酒呑童子が再び動き出していた。現世と黄泉の国とを繋ぐ「黄泉比良坂」を解放することで、酒呑童子は王に君臨しようとしていた。その企みを知った保子は、単身内裏に侵入した一味に立ち向かうが、逆に囚われの身となってしまう。

留守を預かる執事の卜部末武から報せを受けた頼光たちは、兼家の命もあり、京に戻ることになる。

酒呑童子の砦がある大江山に向かった帝の軍勢は大敗を喫していた。兼家は子息の道長に、酒呑童子出生の秘密を語る。酒呑童子は帝の「双子の兄」だった。しかし、奇形であったため人知れず亡き者にされていたのだ。酒呑童子を何としても討ち取らねばと考える兼家だった。

保子は「黄泉比良坂」解放の人柱にされそうになった夕子連れ、砦を脱出しようとするが、茨城童子に阻まれ、保子は滝壺に落ちてしまう。

その頃、家来を引き連れ大江山へとやって来た。砦から脱出した保子と再会した頼光は、保子の手引きで酒呑童子の砦へ侵入する。頼光と酒呑童子の最後の戦いが始まる。激戦の末、頼光は酒呑童子を倒すが、戦いの傷が元で保子は死んでしまう。

頼光の胸に抱かれた保子は、頼光に酒呑童子出生の秘密を語り息絶えるのだった。

戦には勝利した。けれども、腐敗した貴族の世は変わらない。いつの日か武士の世を作り、民のための政をしなければ。頼光は亡き保子にそう語りかけ、地平線を疾走していくのだった。

【了】

【登場人物表】

源 頼光	∴	多田源氏の嫡子
源 満仲	∴	頼光の父。多田源氏の頭領
藤原 保昌（保子）	∴	頼光の盟友
渡辺 綱	∴	頼光の家臣
碓井 惟光	∴	頼光の家臣
坂田 金時	∴	頼光の家臣
卜部 末武	∴	多田源氏の執事
藤原 兼家	∴	右大臣。都の権力者
藤原 道長	∴	兼家の息子
安倍 晴明	∴	陰陽師
酒呑童子	∴	邪鬼の首領
茨木童子	∴	酒呑童子の愛妾
袴垂（藤原保輔）	∴	酒呑童子の手下。保子の弟
鬼同丸	∴	酒呑童子の手下
道摩法師	∴	酒呑童子の手下
夕子	∴	池田中納言の息女
八重桐	∴	金時の母
帝	∴	
忠将	∴	帝の従者
下人 A・B		
武者 A・B・C		
敗走する豪族		

他

## 1. 大江山の山中（夜）

激しい雷雨の降りしきるなか、一人の山男が山中を必死に逃がっている。男の後ろからは篝火を手にした武者たちが追跡してくる。

乱れた息遣いの山男。地面から盛り上がった木の根に足を絡め取られ、汚泥の水溜りに顔ごと突っ込む。気がつくのと、山男は武者たちに包囲されていた。

刀を抜いた武者たちは、その切っ先を容赦なく山男に繰り出す。山男は必死に切っ先を交わすが、幾振りも浴びせられた刃に尽きて、倒れる。

それでもなお、地面を這って生きようとする山男。

その恨みの籠もった眼光が武者たちを捉える。

歩み出た一人の武者が山男にトドメを刺す。

その武者は自らを鼓舞するように叫ぶ。

武者「鬼を……鬼を討ち取ったぞッッッ！」

その声に呼応するかのようには、周囲にいた武者たちも「オオ」と叫ぶ。

その光景を木陰に隠れた半蔀車（はじとみぐるま）の覗き窓から見つめる貴族がいた。

## 2. 二十年後・大江山の山中

山中を彷徨う乞食坊主の姿がある。その男、道摩法師は何かを探している様子。草むらを掻き分けた道摩法師は、朽ち果てた墓標を見つけ、

道摩法師「（ニヤッと笑い）見つけた……とうとう、見つけたぞ」

### 3. 呪文を唱える道摩法師

みるみるうちに空をどす黒い雲が覆い、雷が鳴り響き、砂塵が舞う。そして、血の色をした真つ赤な雨が降り始める。

雨は墓標の下に吸い込まれていき、地面が蠢く。地の底から突き出た腕、汚泥にまみれた鋭い眼光、そして巨体が道摩法師の前に出現する。酒呑童子だ。平伏した道摩法師を、酒呑童子はじつと見つめる。

### 4. 平安京・全景

N 「時は平安の御世。度重なる天変地異による飢饉と、諸国で起こる争いに、土地は荒廃し、民は苦しんでいた」

### 5. 羅城門・階上（夜）

下人Aの灯した蠟燭の明かりが階上の様子を映し出している。

餓死した老若男女の死骸が床一面に拡がっている。

死骸から着物を剥ぎ取り、女の死骸からは髪の毛を切って集めている下人B。

死骸の一つ（若い女）がピクツと動き出す。

小さな悲鳴とドスツと床板に何かが落ちる音。

下人Aが燭台を手に、蠟燭の明かりを向けると、下人Bがこつちへ歩いてくる。

しかし、下人Bは首から上が無くなっていた。

ゴロゴロと足元に転がって来たのは、下人Bの首。

階上に轟く下人Aの悲鳴。

闇の中で蠢く眼光がキラリとし、下人Aに向かってくる。

N 「いつの頃からか、平安京に『邪鬼』と呼ばれる妖魔が出没するようになっていた」

## 6. 羅城門・階下

首なし死体となった下人Aの身体が階上から転げ落ちてくる。

階上の壁をぶち破り、地面にドスツと着地した邪鬼。餓死した女の顔がみるみるうちに鬼へ変わっていき、憤怒と哀しみを混ぜ合わせたような咆哮を上げる。

N「荒んだ人の心に棲みつき、蝕む化け物。それが邪鬼である」

## 7. 内裏付近の大路（夜）

堀の傍らを闊歩する邪鬼。

月明かりに映し出された女（むしたれで顔は分からない）が邪鬼に近づいてくる。

獲物を見つけた邪鬼が女に向かっていくと、女の被ったむしたれがフワツと宙に舞い、その下から凜々しい武者姿の藤原保昌が現れる。

中性的な風貌だが、保昌は女である。

刀や槍を持った雑兵たちも現れ、邪鬼を取り囲む。

雑兵をなぎ払いながら保昌に突進してくる邪鬼。

その邪鬼を、保昌はすれ違い様、鞘から抜いた刀で斬る。脇腹を斬られた邪鬼は屋敷の堀に激突するが、すぐに動き出す。

その保昌に飛び掛かろうとした邪鬼に目掛け、弓矢を放つ美男子の侍（渡辺綱）がいる。綱の矢を受け、邪鬼はその場に倒れる。

綱「（勝ち誇ったように）やはり女子の力では、一太刀で仕留められぬようじゃな？」

保昌「（鋭い眼差しで、綱に向かって刀を突き出す）」

起き上がった邪鬼に、トドメを刺した保昌は、

保昌「男の御辺でも、油断致したようじゃな？（と笑う）」

綱「借りが出来たな。・・・（殺気を感じ）保昌」

保昌「（ただならぬ殺気を感じて）うむ」

見ると、闇夜に蠢く邪鬼の眼が不気味に光っている。

#### 8. 陰陽寮（おんみょうりょう）

篝火が焚かれる祭壇の前で、安倍晴明が祈祷を上げている。その傍らに控えるのは、弟子の碓井惟光である。

晴明「（眼を開き）コレは如何したことか？今までにない数の邪鬼を感じる」

#### 9. 兵部省（ひょうぶしょう）

妖魔討伐隊の陣が敷かれている。

総大将である源満仲、その傍らには執事の卜部末武がいて、伝令より報告を受けている。

末武「（報告を聞き）かような数の邪鬼が現れるとは？（満仲に）直ちに援軍を送らねばなりませんまい」

満仲「頼光の姿が見えぬが、如何したのじゃ？」

末武「確かに、若殿の姿が見えませぬが……まさか?!」

満仲「ほんに仕様のない奴じゃ……（と苦笑交じりに）」

#### 10. 馬上の侍

彼の者こそ、この物語の主人公源頼光である。

手綱を手に、馬を走らせている頼光は風の中を駆け抜けていく。

#### 11. 邪鬼に取り囲まれた保昌・綱

邪鬼に殺された雑兵たちの屍が転がるなか、二人は何体もの邪鬼に取り囲まれていた。

保昌「どうやら我らは、奴等の罠にかかったようだな？」  
綱「いったい何処から湧いてきたのだ」

じわじわと二人を追いつめていく邪鬼ども。

と、そこへ現れる頼光。

馬上より飛び上がった頼光は、邪鬼の囲みに斬り込んで、二人に合流する。

綱「若殿ッ!!」

頼光「末武が来る前に、一気にかたをつけようぞ」

保昌「（うむ、と頷く）」

綱「おう、臨むところじゃ」

頼光「覚悟は良いな?…参るぞ」

保昌・綱「おう」

襲いかかる邪鬼たちと斬り結ぶ三人。

駆けつけた末武率いる精鋭部隊。

末武「皆の者、恐れるでないぞ。突っ込め！」

邪鬼たちを蹴散らす武者たち。

武者が邪鬼の腕を刎ね、邪鬼が武者の首を刎ねるほどの凄まじき死闘である。

聞こえてくる清明の呪文と地面を走る五芒星の光。

地が揺れ、輝かしいばかりの光を放つ。安部清明の放った五芒星の結界が大きく拡大する。五芒星を囲む円の壁に触れただけで、邪鬼は消滅していく。

清明の力が一気に解放されると同時に、邪鬼たちは滅亡する。

## 12・陰陽寮・祭壇の前にいる清明

どす黒い血を吐き、床に膝をつく清明。

碓井「清明様！」

清明に駆け寄り、介抱する碓井。

清明「（手についた血を見つめ）……………」

## 13・内裏付近の大路（早朝）

戦場と化した大路の検分をしている満仲。路には多数の屍が転がったまま。

満仲「邪鬼どもが群れを成し、襲ってこようとは……………」

末武「なれば、それを束ねる者がおるということ」  
満仲「うむ。……途轍もなく巨大で、邪悪な力がな」

眼を見開いて死んだ武者の臉を閉じてやる満仲。

#### 14・数日後・池田中納言邸（早朝）

外に出た門番が何かに気づき、血相を変えて屋敷の  
中に駆け込んでいく。

矢尻にカラスの羽がワサツとついた矢が門に打ち込  
まれていたのだ。

#### 15・藤原兼家邸（昼）

右大臣藤原兼家の御前に参上した満仲と卜部末武。

兼家は傍らに置いた碁笥（白黒の碁石が混じってい  
る）をジャラジャラと弄っている。

兼家の傍らには子息の藤原道長が控えている。

兼家「満仲、そなたはここ最近、洛中で起きている若い姫たちの  
神隠しについて何か聞き及んでいるか？」

満仲「やんごとなき姫君が次々とかどわかされている件にござい  
ますか？」

兼家「左様。しかも神隠しに遭った姫たちの屋敷に、それを予告  
するがの如く、カラスの羽で覆われた矢が射ち込まれていた」

道長はカラスの羽矢を満仲の前に差し出す。

道長「今朝、池田中納言様の屋敷に射ち込まれていたものだ」

満仲「中納言様のお屋敷にございますか？」

道長「中納言殿が、我が父に相談されてのう」

兼家「（満仲に）そなた、これも邪鬼の仕業と思うか？」

満仲「断言はできませんが……恐らくは」

兼家「……にしても、野蛮な邪鬼にかような知恵が働くものかのお」

道長「近頃洛中では、酒呑童子という知略に優れた鬼がおると、

噂になっております」

兼家「ふん、下らぬ。大体、その酒呑童子なる鬼を実際に見た者  
はおらぬはず。民の噂など……誠に忌々しい」

道長「……あるいは、民の恐れが見せた幻かもしれませぬな」

兼家「……して満仲。そなたには、池田中納言殿の屋敷を警護して貰いたいのじゃ」

満仲「かしこまりました」

兼家「そなたの活躍、御上も大層お褒めになっておられるぞ」

満仲「それは、ありがたき幸せにござります」

道長「嫡男頼光の活躍も、洛中の噂では目ざましいと言うがのお」

満仲「お戯れを。不肖の息子でござりまする」

兼家「何の（道長を指し）不肖は我が子息、道長も同じよ。なればこそ、源氏一門にいつそう盛り立てて貰いたいのじゃ」

満仲「ははあ、心得ましてござります（と平伏する）」

頼光（声）「父上は右大臣様に媚び過ぎなのじゃ」

## 16・平安京・洛中（昼）

頼光・綱・保昌の三人が市中の見回りをしている。

綱「しかし、若殿。それが我ら武士の生きる道でござりまするぞ」  
頼光「ワシとて分かっている。……されどやり切れぬ思いが募るばかりなのじゃ」

と、そこへ正面から別の武者の一人がやって来る。

武者B「どけどけ！我らは太政大臣藤原頼忠様に仕える者ぞ！」

綱「（頼光に）若殿、太政大臣様と申せば……」

頼光「うむ。右大臣様の仇敵ぞ」

保昌「面倒に巻き込まれねば良いが……」

武者A「（頼光に）御辺は、源頼光ではないか？」

頼光「如何にも」

武者A「一つ訊きたいのじゃが、御辺の一族はその昔、物の怪と交わったというのはまことか？」

武者B「常人には持てぬ力、そのようにして得たという噂ぞ」

武者C「我らも一つ、物の怪と交わり、力を得たいものよ」

下卑た笑い声を上げる武者たち。

綱「何をッ！」

頼光「綱ッ」 保昌「やめておけ」

綱「……」

保昌「関わるでない。……参ろう」

行こうとした保昌の腕をつかむ武者A。

武者A「おい、此処には藤原の男姫がおるぞ」

武者B「咎人の身内が……良い恥さらしじゃ」

武者A「どうじゃ……ワシと寝屋で相撲でも取らぬか？」

武者C「よせよせ、もしや男を装った物の怪やもしれぬぞ」

高笑いする武者たち。

頼光「保昌……」

保昌「大丈夫じゃ……気になど、しておらぬ」

頼光「そうか。……なれば、参るぞ（と行こうとして）」

急に踵を返した頼光は、武者Aを殴り倒す。

綱「若殿ッ！」 保昌「……無茶をする」

武者B「このお！」 武者C「やっちなまえ」

立ち上がった武者Aも参戦し、頼光たちと路上で派

手な大立ち回りとなる。

見物人が集まってきて、ちよつとした騒ぎとなる。

その騒ぎを聞きつけた役人と検非違使たちがやって

来て、

役人「こらあ、何をしているのだ！」

役人や検非違使たちも巻き込まれ、大騒動となる。

揉みくちやにされる頼光・綱・保昌の三人。

## 17・源満仲の館（夜）

満仲と末武の前にひれ伏す頼光。

末武「若殿ッ、事の重大さをお解かりですか？（グチグチと）殿

と某が右大臣様の御屋敷でどんな思いをしたか……若殿には源

氏の頭領たる御自覚をもっていたきたいもの……」

満仲「末武。ワシから言うて聞かせるゆえ、この放蕩息子と二人

にしてはくれぬか？」

末武「はあ……かしこまりました（と部屋を出て行く）」

満仲「頼光、末武の言い分は最もなこと。しかも喧嘩の相手は、

右大臣様の仇敵藤原頼忠様の配下の者とは……軽率であったな」

頼光「……」

満仲「黙っておらず、何か申し開きをしてみよ」

頼光「父上。某、父上にお聴きしたいことがございます」

満仲「何じゃ？」

頼光「父上には誇りというものがないのですか？」

満仲「…なに？」

頼光「そもそも、我等多田源氏には古の頃より妖魔と闘う不思議な力が備わっております。なれば、何故飼犬の如く公家に媚び諂わねばならないのです」

満仲「…そなた、今宵は少し口が過ぎるぞ」

頼光「（止めず）公家の政事は怠惰の一途を辿っております。

この国のことを憂えばこそ、我等武家が公家になり代わり…」

満仲「そこまでじゃ、頼光!!（と一喝する）」

頼光「……」

満仲「力とは本来の目的のために用いてこそ、初めて力となる」

頼光「某には、分かりませぬ！」

満仲「なれば、分かつと努めよ」

頼光「……」

満仲「今はただ…耐えるのみぞ。力を蓄え、機会を窺い、待つのだ。その時が来るまで、多田源氏の血を受け継いでいくことが、ワシの役目と思っておる」

頼光「……」

満仲「右大臣様から命が下った。これより我等は池田中納言様の

御屋敷の警護につく。…（強い口調で）良いな？」

頼光「（納得いかないが、頭を垂れる）」

## 18・保昌の寝所（夜）

夢を見て、うなされている保昌。

声「姉上…姉上…」

## 19・保昌の夢・六条河原の刑場

赤や緑、青など色とりどりの霧が流れている。

河原には、後ろ手に縛られた保輔が座らされている。

保輔こと盗賊『袴垂』の斬首が執行されようとしているのだ。

困いの向こうからは袴垂へ喝采を送る民たち。

皆、不気味な仮面をつけ、笛や太鼓の音が陽気に流れている。

袴垂のもとへ駆け寄る姉の保子（保昌）。

保子「（抱きついて）保輔ッ！」

袴垂「……」

保子「（泣いて）お前は、何と……何と愚かなのじゃ」

袴垂「某は世のため貧しき民のため、決して間違ったことはして

おりませぬ」

保子「保輔……私は忘れぬぞ。（額をつけ合い）そなたの温もり、

そなたの胸の高鳴り、そなたの声を」

袴垂「（さすがに声に詰まり）……姉上」

保子「姉ではない。……今からワシは女子を捨てる。……そなたの

兄ぞ。そなたに代わり、ワシが家督を継ぐのじゃ」

介錯人に引き離される二人。

袴垂の垂れた首を介錯人が刎ねる。

飛び散った血しぶきが、保子を濡らす。

地面にゴロツと転がった袴垂の首。

その閉じた瞳が保子の方を見てカツと開き、

## 20・ハッと起きる保昌

じつとりと嫌な汗を拭いながら、

保昌「今が夢か、あれが夢か……ワシには分からぬわ」

雲ひとつない夜空に浮かぶ満月が輝いている。

## 21・騎乗の保昌

月夜の道を馬に跨ってひた走る。

## 22・森の中・小滝の畔

森の中を駆け回った保昌は汗ばんでいる。

小滝の流れる滝壺の畔に馬を止めると、保昌は水辺で衣を解く。

着物の下から現れたのは、女のしなやかな肢体。

全裸となった保昌は水に入る。

透き通るような乙女の柔肌。

そんな保昌の姿を木陰から見つめる者がいる。

保昌の美しさに見惚れていると、

声「御上、如何なされましたか？」

従者の**忠将**が声をかけた人物は、**帝**である。

(帝の御姿は、画面にはつきりと映らない)

近くには御輿と従者たちが控えている。

帝「忠将、声を立てるでない」

忠将「はあ(と口を噤み)」

帝「月に映し出され：：何と美しい。忠将、かの姫は何者ぞ」

忠将「(見て) あれは藤原の男姫にございますな」

帝「コレ、あまりジロジロと見るでない」

忠将「はあ(と、目を覆う)」

帝「男姫とは：：あの身体は間違いなく姫ではないか？」

忠将「かの者は訳あって、女子を捨てたのでございます」

帝「女子を捨てるとは、よほどのことがあった筈。：：そちはその

理由を知っておるか？」

忠将「御上は袴垂なる盗賊のことをご存知で在らせられますか？」

帝「うむ、幾年か前に洛中を騒がせた盗賊のことじゃな？」

忠将「あの男姫は、袴垂の姉でございました」

帝「なるほど：：それが女子であることを捨てさせた理由か」

忠将「さようでございます。：：名門藤原の面汚しと、一族の者た

ちの間では蔑まれていたとか：：」

帝「その捨てたる女子の部分：：欠片でも構わぬ。朕が拾おてみ

たいものじゃ」

帝に気づかず、水浴びをしている保昌。

叢から飛び上がる野鳥の鳴き声。

振り向く保昌は帝の御姿を目撃する。

目と目。保昌と帝はしばし見つめあったまま動かな

いが、「ハッ」とした保昌は自分の肢体を着物で隠すと、森の繁みに飛び込むのだった。

### 23・数日後・都の大路（夜）

むしたれで顔を隠した白拍子が笛を吹いている。

### 24・一条戻橋

渡辺綱がやって来ると、橋の中腹でむしたれの白拍子が笛を吹いている。

その美しい音色に、ウツトリとしてしまう綱。

綱「もし：：：どうなされましたか？」

女「供の者とはぐれ、道に迷うたのでございます」

綱「かような時分に女子が独り歩きとは：：よろしければ、某がご

同行仕りましょう」

女「でも：：：」

綱「いやいや、ご案じ召されるな。某は源頼光が家臣、渡辺綱と

申す者」

女「まあ、頼光様のご家臣の方？」

綱「どうか、ご安心下さいませ。さつ（と手を差し出す）」

女「ありがとうございます（とむしたれの奥の目がキラリとする）」

### 25・池田中納言邸

風もないのに屋敷中の篝火がいつせいに消える。

検非違使たちに動揺が走るのを見た頼光は、

頼光「怯むな！（保昌に）姫様を頼む」

保昌「心得た」

### 26・一条戻橋

綱が月の映った水面に目をやると、笛の女が映っていないことに気づく。

綱が刀の柄に手をかけたのと同時に、宙に跳ね上がった女は欄干の上に着地する。

女の被っていたむしたれが宙を舞う。

綱「(刀を抜き)おのれッ!!物の怪めッ!!」

女(茨城童子)は分身の術を遣い、橋のいたるところに自らの分身を出現させ、綱を翻弄する。

## 27・池田中納言邸

姫君夕子の部屋。

明かりが消えたことで女官たちが動揺するなか、夕子だけはのんびりしている。

夕子「(月を見て)アラ、綺麗な月。…よき歌を思いつきそう」

暗がりの中より現れた武者が、

武者「姫様、クセ者にござります。 (手を差し出し) さあ、こちらへ」

夕子の手を引いて行こうとした時、

保昌「待てッ!!」

月に厚い雲がかかり、暗がりの中で二人の武者が対峙する。

保昌「お前は誰ぞ?…誰なのじゃ?」

武者は刀を抜き、保昌に向かってくる。

応戦する保昌と武者が剣を交える。

暗闇で刃と刃がぶつかり、火花が散る。

保昌、相手の刀裁きに覚えがある。

×

×

×

×

×

保昌のフラッシュバック。

幼い頃の記憶。

娘姿の保子(保昌)が剣の稽古をしているのは、弟の保輔である。

×

×

×

×

×

保昌「…そなた、保輔か?」

雲が晴れ、月明かりが二人を照らす。そこにいたのは、弟の保輔であった。

保輔「お久しゅうございます、姉上」  
保昌「?!」

## 28・一条戻橋

茨木童子の術に翻弄されている綱。  
綱は目を閉じ、神経を集中させる。

茨木童子の実体が綱に鋭い切っ先を繰り出した瞬間、綱の刀が動いた。

綱は茨木童子の右腕を一刀両断する。

茨木童子「ぐわあああ。：：なぜ、わらわの術を：：」

綱「ワシは鼻が利くのよ。犬並みとは言わぬが、花の匂いには敏感でのお」

刃を茨木童子に向ける綱。

茨木童子「笛が：：致し方ない：：」

霧を生み出し、その中へ消えていく茨木童子。

地面には、切り落とされた右腕とその手に握られた笛が残されている。

## 29・池田中納言邸

保昌「そんな：：されど、そなたは：：：：」

動じた保昌の隙をつき、保昌の刀を弾く保輔。

床に突き刺さる保昌の刀。

保輔はすぐさま夕子を当身で気絶させ、抱きかかえると常人とは思えない素早さで駆けていく。

「姫がさらわれたぞ!」、 「賊を捕らえるのじゃ」

検非違使たちが保輔に殺到するが、追いつけない。

塀に飛び上がった保輔は韋駄天（いだてん）の如く

彼方へ消えていく。

頼光「（来て）保昌、姫様は？」

保昌「すまぬ。取り逃がした：：：：」

## 30・大江山

山腹に隠れるように築かれた酒呑童子の砦がある。

### 31・酒呑童子の砦

酒呑童子の寝所。

天然の要塞に似合わず数々の調度品（舶来）に囲まれた豪華絢爛な室内装飾である。

御簾の向こう側。酒を呑む酒呑童子の傍らに寄り添う茨木童子。

地の底から女の悲鳴と泣き声が聞こえてくる。

茨木童子「人が絶望する声とは、何と耳に心地好いのでしょうか」

片腕のない茨木童子は、髪に隠れた顔半分が邪鬼の姿になっている。その右腕は、みるみるうちに再生し、復活する。

酒呑童子「（杯を空け）酔狂よのお、茨木は」

酒呑童子の杯に酒を注ぐ茨木童子。

酒呑童子「：：やはり、そなたの笛がなくては、酒が旨くないな」  
茨木童子「（クスツと笑い）酒よりも：：楽しいことはあります」

茨木童子の鋭い爪が酒呑童子の胸をツーンと撫でていくと、御簾の向こうに酒呑童子の配下たちが現れる。

鬼同丸、道摩法師、そして袴垂である。

鬼同丸「御大将。いよいよで、ござるな」

酒呑童子「うむ。：：ただ、気になるのは多田源氏の動き」

鬼同丸「彼奴等の力など、如何ほどのものでありましょうや？（刀を抜き）この鬼同丸、多田源氏の奴等を片っ端から殺してやる」

袴垂「奴等を侮るではないぞ」

鬼同丸「ほお、そちは随分と源氏の肩を持つんじゃないやあ？」

袴垂「なに?!（と刀の柄に手をかける）」

鬼同丸「ヤル気か?!（と刀を構える）」

酒呑童子「やめよ!!（と一喝する）」

鬼同丸、袴垂互いに引く。

茨木童子「アラ：：血が見れず、残念（クスツと笑う）」

酒呑童子「（道摩法師に）そちはかねてからの計略通りに動くの

じゃ」

道摩法師「御意」

酒呑童子「（茨木童子に）そなたの笛……取り戻しに行かねばな」

茨木童子「（酒呑童子に寄り添い）……はい」

### 32・藤原兼家邸（夕刻）

保昌が兼家・道長と対面している。

保昌「……今、何と申されました？」

兼家「そなたに入内せよと、御上が仰せなのじゃ」

保昌「（苦笑し）帝も異なことを仰せになれるもの」

道長「控えよッ!! 畏くも、御上の思し召しなるぞ」

保昌「そう申されても、某は男でござりまする」

兼家「白であっても、帝が黒と仰せになれば、黒になるのが世の理じゃ」

保昌「さりとて、男は女子にはなれませぬ」

道長「戯言を申すな！そなたも一族の端くれなれば、我等の立場というものを考えよ」

保昌「どう申されてもこの保昌、女子ではありませぬ故、たとえ

帝の仰せで在っても、承ることなりませぬ」

道長「咎人の身内が、何様のつもりじゃ!!」

保昌「（深々と頭を垂れる）」

兼家「もう分かった……下がってよい」

兼家のもとを辞する保昌。

碁笥に手をつ突っ込んだ兼家が、表情を変えることなく手にした碁石を床にぶちまける。

### 33・兵部省（夜）

篝火を焚き、檢非違使たちが武装し、臨戦態勢の重々しさが伝わってくる。

満仲（声）「……しかし、まことに来るであろうか？」

### 34・同・執務の間

末武と評議を重ねている満仲。

末武「清明殿の申すこと故、間違いないかと」

満仲「うむ（と配置図に目を通す）」

### 35・同・籠もりの間

茨木童子の笛を護っている渡辺綱の背中。

### 36・同・表門

気がつくくと、周囲を濃い霧がゆっくりと包んでいる。

霧の彼方より馬の蹄が聞こえてくる。

警戒する検非違使たちだったが、蹄の音はピタッと止む。

霧の向こうにボオッと明かりが見える。

まるで鬼火のようないくつもの火。

検非違使「（何だろう？）」

その火が物凄い速さで見張りの検非違使たちを貫く。それは火矢だった。

検非違使「敵襲!! 敵襲じゃあ!!」

霧の中から姿を現したのは、鎧を身にまとった武者姿の邪鬼たちと馬上の酒呑童子。

怯んだ検非違使たちを次々となぎ倒す邪鬼軍団。

### 37・同・府内

検非違使が「敵襲、敵襲でございます！」と我を失

った様子で飛び込んでくる。

武者姿の邪鬼が殺到してくる。

末武「（弓矢部隊を指揮し）放てッ!!」

放たれた弓矢が邪鬼に当たるが、強固な鎧を纏っているためまったく効果がない。

末武「おのれ、邪鬼め!!」

槍や刀を手にした邪鬼に次々と斬られていく検非違使たち。

### 38・同・府内

邪鬼と切り結んでいる保昌。

袴垂が兵部省の屋根伝いに走っていく。

保昌「(見つけ)：：保輔(と邪鬼を斬り捨てる)」

保昌は屋根に飛び上がると、袴垂を追跡する。

### 39・同・執務の間

なだれ込んでくる邪鬼と戦う頼光と満仲。

酒呑童子が現れる。

鬼面の下から垣間見える醜い顔、そしてその身体から発せられる威圧的な雰囲気、みな硬直して動けなくなってしまう。

頼光も恐れ震えているが、何とか留まっている。

酒呑童子「ほお、ワシの姿を見ただけで、常人なら逃げ出す筈。

それを踏み止まるとは、大したものよ」

頼光「(震えながら)お前が：：酒呑童子」

酒呑童子「如何にも。我が愛妾である茨木の笛、返して貰うぞ」

満仲「(邪鬼と切り結びながら頼光に)そやつの妖気はただならぬぞ。心致せ」

頼光「某の名は源頼光。：：いざ、参る」

酒呑童子「来いッ!!」

酒呑童子に立ち向かう頼光。

五尺はあるかという鉞のような大太刀を振り下ろす酒呑童子。

その大太刀を自分の剣で何とか受け止めた頼光だったが、吹き飛ばされ、壁を突き破ってしまう。

すかさず攻撃を続ける酒呑童子。

その強大な力に圧倒されそうになる頼光。

#### 40・同・籠もりの間

御札によって封印された部屋を見つけた鬼同丸。  
戸に近づいた邪鬼が御札の霊力で感電し、悶える。  
鬼同丸「かようなもの、オレに効くかッ」

戸をぶち破った鬼同丸が、御籠もりをしていた綱の  
背中に刀を振り下ろす。

鬼同丸「死ねッ!!」

斬り捨てられる綱。……が、それは紙人形であった。

鬼同丸「?!」

柱の影から現れた渡辺綱が弓矢を浴びせる。  
床に仕掛けられた五芒星の結界が光る。

綱「かかったな、物の怪めッ」

#### 41・陰陽寮・祭壇の前

安倍晴明が祈祷を上げている。  
傍らで茨木童子の笛を警護する碓井惟光。

#### 42・兵部省・屋根の上

道摩法師のもとへ参じる袴垂。

袴垂「どうじゃ?」

道摩法師「(三つ目を見開き) 間違いない。笛は陰陽寮」

保昌「(来て) 保輔ッ!!」

袴垂「(道摩に) ここはワシに任せろ」

道摩法師「頼むぞ」

陰陽寮へ向かう道摩法師。

保昌「保輔……いや、袴垂。覚悟致せ」

袴垂「姉上……貴方に某は斬れぬ」

保昌「いや……斬るッ」

屋根の上で刃を交える二人。

保昌「そなた……腕を上げたな」

袴垂「人であることを捨てました故」

保昌「…されど、脇の甘さは人の頃と変わらぬ」

突き出した保昌の刀をかわす袴垂。

保昌「(なにい?!)」

袴垂「変わらぬは、姉上のほうじゃ」

保昌の剣を弾く袴垂。

出血する手首を押さえ、しやがみ込んだ保昌に剣先を向ける袴垂。

袴垂「言った筈。…人であることを捨てぬ限り、某は斬れませぬ」

踵を返し、陰陽寮へ向かう袴垂。

保昌「(瓦を叩きながら涙) 畜生…畜生…」

### 43・陰陽寮・祭壇の前

晴明が祈禱を止める。

結界の淵に道摩法師が現れる。

晴明「道摩…地獄より舞い戻ってきたのか」

道摩法師「晴明…積年の怨み、今ここで晴らさせてもらおう」

晴明「愚かな…己の力を私利私欲のため使おうとした報いじゃ」

道摩法師「黙れッ」

結界を突破した道摩法師と戦う晴明。

道摩法師の発した邪悪な波動を晴明が弾く。

二人の戦いは互角である。

### 44・兵部省・籠もりの間

晴明の祈禱が無くなり、結界の呪縛から解かれた鬼同丸。

綱「クソッ…今少しであったのに」

立ち向かってくる鬼同丸を、綱は迎え撃つ。

二人の切っ先が火花を散らし、激闘になる。

### 45・同・執務の間

府内のあちこちから火の手が上がっている。  
酒呑童子の攻撃に劣勢である頼光。

大太刀を酒呑童子が振るうだけで波動が生じ、壁や柱が割れ、崩れ落ちてくる。

酒呑童子「無残に討ち取られし同胞のため、その首貫うぞツ!!」

頼光「……………」

頼光の両腕が青白く光る。蓄積していた靈力を解放し、一氣に刀で斬り込む。

一打目は空振り、二打目が柱を切断し、三打目が酒呑童子の肩を貫く。

突き刺さった刃を握りしめた酒呑童子は、それを叩き折る。

酒呑童子「このワシに一太刀浴びせるとは、褒めてやるぞ。…

しかし、戯れはこれまでじゃ」

頼光「(クソツ)」

#### 46・陰陽寮・祭壇の前

笛を守る惟光の前に袴垂が現れる。

晴明と道摩法師、そして惟光と袴垂がそれぞれ戦う。

呪術を操っていた晴明が咳き込み、吐血する。

道摩法師「貰ったツ」

道摩法師の放った波動が晴明を吹き飛ばす。

惟光「晴明様ッ(と道摩法師に立ち向かう)」

すかさず放たれた道摩法師の波動が、今度は惟光を吹き飛ばす。

茨木の笛を手に入れる袴垂。

袴垂「引き上げだ」

行こうとする袴垂へ晴明は式神を放ち、忍ばせる。

気づかず引き上げていく袴垂と道摩法師。

瓦礫から這い出して来た惟光が晴明に駆け寄り、

惟光「晴明様、大丈夫でございますか？」

晴明「(息が乱れながら)惟光、祭壇の太刀を今すぐ若殿に届け

よ。ワシの靈力を込めておいた」

惟光「しかし：」

清明「早う行け！」

惟光「はッ（と後ろ髪を引かれる思いで）」

祭壇で青白く光る太刀（鬼斬丸）を手にし、兵部省へ向かう。

#### 47・炎上する兵部省

酒呑童子の大太刀が頼光に振り下ろされようとして  
いる。

末武「（邪鬼と切り結びながら）若殿ッ」

頼光と酒呑童子に割って入る満仲。

満仲「源満仲、相手になる」

酒呑童子「面白いッ（ニヤツとし）来いッ」

酒呑童子と戦う満仲。

勝負は満仲が優勢に見えたが、酒呑童子の大太刀が  
満仲の刀を弾いてしまう。

満仲「（クッ）」

酒呑童子に斬られ、力尽きて倒れる満仲。

頼光「父上ッ」 末武「殿ッ」

そこへ駆けつけた惟光が、

惟光「若殿ッ、太刀を」

惟光が宙に投げた鬼斬丸を、頼光が手にする。

柄から鬼斬丸を抜いた頼光は、酒呑童子に立ち向か  
っていく。

頼光「うおおおお」

鬼斬丸を酒呑童子に振り下ろす頼光。

酒呑童子の大太刀とその胸を切り裂く。

酒呑童子「ぐわああああ」

膝をつく酒呑童子。

鬼同丸「（駆け寄り）御大将ッ」

綱「（頼光に駆け寄り）若殿ッ」

酒呑童子を抱え、鬼同丸は退く。

力を使い果たし、その場に倒れる頼光。

頼光「父上：…（と綱に抱きかかえられ、満仲のもとへ行く）」  
満仲「よおくやった、頼光」

頼光「血を：…血を、早く止めなくては：…」

満仲「よいか：…今から、そなたが多田源氏の頭領じゃ」

頼光「血を：…誰か、父上の血を止めてくれ」

満仲「（手を握り）生きて、武家の世を：…民を、この国を守るは、  
我らの使命ぞ：…」

頼光「もうそれ以上、話してはなりません：…誰か、血を止めよ」

満仲「命を繋げよ：…それが、そなたの：…そなたの：…」

握りしめた手がだらりと垂れ、満仲が絶命する。

頼光「父上：…（静かに呟く）」

炎上する兵部省は崩れ落ちていく。

頼光と満仲の亡骸を取り囲むように、末武、保昌、  
綱、そして惟光がいる。

#### 48・大江山・酒呑童子の砦

笛を取り戻した茨木童子は、愛おしくその笛を見つ  
め、美しい音色を奏でる。

酒呑童子「良き音色じゃ：…やはり、そなたの美しい調べはワシの  
慰めになる」

頼光との闘いで傷ついた酒呑童子は「血の池」に沈  
められようとしていた。

酒呑童子「源氏の子倅め。：…この酒呑童子、不覚を取ったわ」

道摩法師「さあ、まずは乙女たちの血で身を清め、英気を養うこ  
とです」

酒呑童子「ワシが再起するまで、後のことは頼むぞ」

道摩法師「予てからの手筈通りに」

酒呑童子「黄泉比良坂（よもつひらさか）を開く。：…さすれば、

ワシの御世が始まる：…頼むぞ、道摩」

道摩法師「御意」

「血の池」に沈んでいく酒呑童子。

道摩法師「：…さて、手筈を進める前にしておかねばならぬことが  
ある」

袴垂を凝視した道摩法師、いきなり小柄を投げる。

茨木童子「何をなさるッ」

袴垂「……………」

袴垂の着物に忍んでいた式神を仕留めたのだった。

鬼同丸「油断したな、袴垂」

道摩法師「それとも、知ってのことかな？」

袴垂「なにい?! (柄に手をかける)」

道摩法師「そう怒るな、戯言じゃ。…にしても、清明にこの場所を知られてしまったのは、迂闊であった」

鬼同丸「どうするのだ？」

道摩法師「(袴垂に) 戯言である証を示す為にも、そなたには働いてもらうぞ」

袴垂「(柄から手を離し) もとより、そのつもりじゃ」

#### 49・藤原兼家邸(数日後の昼)

濡れ縁で碁を打ちながら、道長と話す兼家。

兼家「…大江山と、清明が申したか？」

道長「はい。そこに敵の本拠地があると」

兼家「左様か…直ちに軍勢を送り、討伐することを帝に奏上せねばな」

道長「総大将はやはり、源頼光でございますか？」

兼家「いや、頼光は関東へ下向させようと考えておる」

道長「何故でございます？ 邪鬼と戦うのは、多田源氏の血を引く頼光が適任の筈」

兼家「先の酒呑童子との戦によって、頼光の洛中での評判は高い」

道長「なればこそ、邪鬼討伐は頼光が適任でありましょう？」

兼家「なればこそ、頼光を総大将にしてはならぬのだ」

道長「？」

兼家「これ以上、武家に余分な力をつけさせてはならぬ。特に頼光のような者にはな」

道長「(理解し)…それが、公家の政を守ることに繋がるのですね？」

兼家「道長…そなたは賢いのお」

碁盤に石を打つ兼家。道長の負けは明白。  
兼家「されど、まだまだよのお」

## 50・源頼光の館（昼）\*旧源満仲の館\*

兼家の名代としてやって来た道長を上座に、畏まっている頼光・末武・綱。

頼光「武蔵の国：でございませるか？」

道長「左様。（しれっと）彼の地において、妖魔が出没しておると聞いてのう。そなたに出向いてもらい、退治してほしいと御上が仰せじゃ」

頼光「さりながら、それでは都の守りが手薄になりまする」

道長「心配には及ばぬ。すでに諸国の豪族を集め、大江山への討伐隊を送る手筈は整えておる」

頼光「（道長に）右大臣様に申し伝え下さいませ。この源頼光、

武蔵の国に赴き、帝の御為、必ずや妖魔を討伐して参ります」

道長「よく申した、頼光。御上もお喜びになられるであろう」

頼光「ははあッ」

道長に畏まる頼光の丸まった背中を蔑視する綱。

## 51・同・馬小屋（昼）

馬の世話をしている保昌のところへ憤慨した綱がやって来る。

綱「…まったく、殿は変わってしまった。…腰抜けじゃ」

保昌「何を怒っているのだ」

綱「（桶の水を柄杓で飲みながら）聞けば、御辺も失望いたすぞ」

保昌「？」

## 52・時間経過・馬小屋

水桶に映った侍姿の自分を見つめる保昌。

保昌「（何かを決意した表情）…」

### 53・藤原兼家邸（夕刻）

やって来た兼家が目を見張る。

そこには美しい姫が畏まつていた。保子である。

兼家「胸に詰まるような美しさ。．．やはり、帝は確かな眼をお持ちじゃ」

保子「二度と拾わぬと思ひ定めた『女子』を拾いました」

兼家「うむ。保子、そなたを今よりワシの娘とし、入内申し上げるまでこの屋敷に留め置く。．．身にこびり付いた『武士』の垢を落とさねばならぬからな」

保子「仰せの通りに：：：（頭を下げ、畏まる）」

### 54・安倍晴明邸（数日後）

床に伏せていた晴明が、惟光に抱き起こされる。

頼光「晴明殿、身体有加減は如何じゃ」

晴明「いくら修行を積み、力を手にしたとて、所詮は人。．．臓腑にできた腫れものを治癒することも敵いませぬ」

頼光「すぐにまた、都に戻ってくる。それまでに必ず、病を退治するのじゃぞ」

晴明「かたじけのうございます。．．本日、お呼び立て申し上げたのは、この碓井惟光についてでございます」

惟光「（頼光に頭を垂れる）」

晴明「この者は数多いる私の弟子共のなかで、私以上の力を秘めし者でございます。どうか、頼光様の家来にお召し抱え下さいませ。必ずや、お役に立ちましょうや」

頼光「晴明殿。（胸に詰まり）お心遣い、かたじけない」

### 55・源頼光の館（出立前夜）

美しい三日月の出た夜。

頼光が寝所で寝ていると、何者かが忍んで来る。

頼光「（クセ者かと思ひ、刀に手を伸ばし）何者」

御簾の向こう、月明かりに照らされているのは美し

い女子である。

頼光「そなた……保昌、か？」

保子「（御簾を潜って）しい……今宵は保子として貴方様のもとへ参りました」

頼光「……（入内を）決めたのだな？」

保子「はい。……その前に、今宵だけは貴方様の情けをお受けしたく、こうして参ったのです」

頼光「しかし……それは……」

保子「私にこれ以上、恥をかかせないで下さりませ」

頼光の口を吸う保子。

頼光もまた、保子を激しく求める。

生まれたまま姿になって、二人は抱き合うのだった。

## 56・頼光の寝所（明け方近く）

頼光が目覚めると、御簾を上げ、出て行こうとする

保子がいる。

頼光「……行ってしまうのだな？」

保子「貴方様も遠くに行かれてしまわれるのですね？」

頼光「……昨夜のことはうつつであったのか？」

保子「いえ……夢でござりましょう」

頼光「そうか……夢であったのか……」

保子「一夜限りの……夢でござります。されど、それだけで女は生涯、生きて行けます」

頼光「……達者でな」

保子「貴方様も……」

朝霧の中に消えていく保子の背を見送る頼光。

## 57・源頼光の館・門前

騎乗の頼光、綱、そして惟光。

留守居を任された末武が見送りに出ている。

頼光「末武、留守を頼む」

末武「はッ」

頼光「(綱・惟光に)……では、参るぞ」

惟光「はッ」

綱「……………」

出立する三人の武士を見送る末武。

末武「(感慨深く)何と凛々しい姿。…殿、ご覧下され。今や若殿は立派な源氏の頭領でござる」

## 58・安倍晴明邸(夜)

床より身を起こした晴明が、蠟燭の明かりで書物を読んでいる。

月夜に虫の音。心地好い風が部屋を吹き抜け、それを晴明が肌で感じていると、その胸を矢が貫く。

晴明「ぐはぁ(吐血し、床に倒れる)」

道摩法師「油断したの、晴明」

晴明「かような身体でなければ、決して油断しなかったものを」

道摩法師「我らの仲間になれば、生き永らえることができるぞ」

晴明「ふん：：なれば、死ぬほうがマシじゃ」

道摩法師「では、死ぬ前に教えてくれぬか？：：八咫鏡の結界を説

く呪文を」

晴明「貴様ら：：まさか：：黄泉比良坂を：：」

道摩法師「その通り。解放するのよ」

晴明「愚かな：：ワシ：：が：：教え：：る：：と：：思う：：か」

道摩法師「まさか。もとより、あの男に直接訊くつもりじゃ」

袴垂が現れる。道摩法師は呪文を呟き、口から吐いた粘着物質(ガムのような物)を袴垂の顔にかける。袴垂はみるみるうちに、安倍晴明となる。

絶命した晴明はカッと目を開いている。

## 59・野宿する頼光一行(夜)

焚火の番をしている綱。

近くにある大樹の袂に頼光と惟光がいる。

惟光「かような大樹を一刀で切り倒すことができれば、鬼斬丸を

使いこなすことができずる」

頼光「一刀：・でか？」

惟光「力をうまく刃に集中するのです。さすれば、離れた場所からでも大樹を一刀両断できます」

頼光「鬼斬丸：・使いこなせるように、ならなくてはな」

惟光「（頷く）」

大樹に向かって素振り始める頼光。

## 60・旅する頼光たち

棚田の広がる道を行く頼光たち。

山腹に立つ柿の木を見つめる。

頼光は柿の実を齧ってみると、それは渋柿。

惟光も齧る。しかめ面。

笑う頼光と惟光。

頼光は綱にも渋柿を渡そうとするが、綱はさっさと行ってしまふ。

惟光の乗った馬の鞍に渋柿が吊るされている。

頼光と惟光の少し先を行く綱の馬。

夜。野宿する三人。

干飯を戻した雑炊を食べる頼光たち。

綱だけは一人、離れたところで雑炊を啜る。

大樹の前に、鬼斬丸を素振りする頼光。

その様子を見ている綱。

山岳地帯を行く頼光たち。

惟光が鞍に吊るした渋柿は干乾びてきている。

頼光と惟光の先を行く綱だったが、徐々に二人の馬へ速度を合わせていく。

夜。野宿する頼光たち。

頼光は大樹に向かつて素振りをしている。

頼光が気づくと、綱も傍らで居合の稽古を始める。

頼光の鬼斬丸が青白く光り、木の幹を掠める。

驚き、思わず目を合わせてしまう頼光と綱。

× × × × ×

丘陵地帯を行く頼光たち。

惟光は鞍に吊るした干柿を喰べる。

旨いという表情に、頼光と綱が微笑む。

× × × × ×

河原の畔で野宿する三人。

惟光はすでに眠っている。

焚火を囲む頼光と綱は、干柿を着に酒を呑んでいる。

頼光「そなたが思っておること、察していないわけではない」

綱「…殿は家督を継いでから、お変わりになりました」

頼光「変わらねばならぬと、気づいたからじゃ」

綱「……」

頼光「武家は二本の足で立つことを知らぬ山猿じゃ。公家は二本の足で立つことを知っておる。なれば、武家は公家の懐に飛び込み、二本の足で立つことを覚えねばならぬ」

綱「……」

頼光「父上の跡を継いでから、ワシの胸には父上の言葉・言葉がいちいち突き刺さってくる」

綱「……」

頼光「父上のご苦勞をもっと理解していたらと、毎日のように悔やんでおる」

綱「……」

頼光「二本の足で立たねばならぬ。…その手助けをしてはくれぬか？」

綱「(酒の入った瓢箪を頼光の杯に傾け)…立たねばなりません  
い、民とこの国のために」

頼光「(杯の酒をぐっと空け、綱に微笑む)そなたも、呑め」

綱「(頼光から受けた杯の酒をぐっと空ける)」

薄目を開けた惟光が「フツ」と笑う。

61・相模国・足柄峠

背後を臨む富士山を背に、道を急ぐ頼光たち。

一行の前に背中に鉞を背負った田舎侍が現れる。

田舎侍「暫く、暫くそこに居られるのは、源頼光様の御一行とお見受け致す」

綱「（頼光を庇うように）そなたは何者じゃッ」

田舎侍「某は坂田金時と申す侍でございます」

綱「鉞を担いだ侍など、見たことがないわ」

金時「何をッ！御辺、無礼ではないかッ」

綱「無礼者はどっちぞッ」

金時「ヤル気かぁッ」

綱「臨むところじゃッ」

馬から降り、刀を抜こうとする綱にいきなり飛びかかる金時。

互いに組み合って一步も引かない。

頼光「やめよ、二人とも止めるのじゃッ」

金時が力任せに綱を投げ落とす。

金時「ふんッ、どんなもんじゃッ!!」

地面に叩きつけられた綱は、金時の足を払うと、ねじ伏せてしまう。

金時「お前ッ、勝負がついたのに、卑怯だぞッ」

綱「うるさいッ！子供の喧嘩とは訳が違う」

声「お待ち下さりませ」

金時の母・八重桐が里の人々を引き連れ、畏まる。

頼光「（綱に）そやつを放してやれッ」

綱「（金時を解放し）力はあるが、隙だらけじゃ」

金時「何をッ」

八重桐「おやめ、金太郎ッ」

金時「母上：・（しゅんとなる）」

八重桐「我が子金時のご無礼、どうぞお許し下さいませ」

頼光「何ぞ、訳があるようじゃな：・某でよければ、申すがよい」

八重桐「かたじけのうござりまする」

## 62・村長の屋敷

八重桐より話を聞いている頼光たち。

惟光「物の怪でござるか？」

八重桐「はい。村の外れにあります鎮守の森に入った旅人や村の者がことごとく神隠しに遭っております」

村長「鎮守の森には水源があり、今年に入ってから水が絶え、田も畑も干上がって、作物ができません」

綱「…されど、それが物の怪の仕業と、一概に言えぬのではないか？」

金時「誰も御辺の意見など、聞いてはおらぬわッ」

綱「なにい」 金時「ヤル気かあ」

頼光「やめよッ」 八重桐「金太郎ッ」

綱・金時「……」

頼光「惟光、そなたは如何思う」

惟光「いずれにせよ、森に入ってみる必要がありますな」

綱「…されど、我らは先を急ぐ身ぞ？」

頼光「放つてはおけぬだろ？」

八重桐「(村人らと頭を垂れ) ありがとうございます。…案内はこの金時が務めます」

金時「そうそう、俺が案内を…ッて、ええええ！」

## 63・村はずれ・鎮守の森

昼間だというのに、深い霧が森を覆っている。

森の奥に分け入っていく頼光たち。

先を争うように先頭をいく綱と金時。

頼光「(惟光に) 霧が深いな」

惟光「人の哀しみ、憎しみ、怒り、無念…そのようなものを、この霧より感じます」

風が吹き、木々より鳥がいつせいに飛び立つ。

頼光「何か来る。(綱と金時に) 心致せ」

各々武器を手に構えるが、気配が消える。

綱が緊張を解いた瞬間、木々の間より現れた触手が

綱を奪取し、森の奥に消えていく。

頼光「（ハッと）綱ッ！」

惟光「（金時に）追うぞ」

金時「おう」

綱が連れ去られた方向へ走る金時と惟光。

二人を追う頼光は、空から雪のような白い結晶が降ってきているのに気がつく。

：・惟光と金時、身動きが取れなくなってしまふ。

身体に纏わりついたのは、幾重にもなった蜘蛛の糸。

霧が晴れ、二人の傍らには干乾びた旅人や武者の死骸が現れる。

金時「ひいいい：・何だ、コレは？」

惟光「（頼光に）殿、来てはなりません」

立ち止まる頼光。

視線の先には、朽ち果てた一軒の廃屋があつて、綱が引きずり込まれた跡が続いている。

身動きの取れない惟光と金時。

#### 64・地の底（土蜘蛛の巣）

綱が目を覚ますと、地面には無数の頭蓋骨が転がっている。

闇に蠢く巨大な生き物。土蜘蛛である。八本の足と触手、突き出た頭頂部は女性の容貌だが、裂けた口には無数の牙がある。そして、丸みを帯びた胴体には苦悶の表情をした人面が浮かび上がっている。

綱に突進してくる土蜘蛛。

腰に差していた刀が無いことに気づいた綱は、巢穴を逃げながら落ちている石や頭蓋骨を土蜘蛛に投げつける。

巢穴の入口を見つける綱。

落ちている自分の刀を拾い上げた瞬間、土蜘蛛の吐いた糸が刀の鞘に巻きつく。

鞘から素早く刀を抜いた綱は、次々と繰り出されて

65・地上

くる土蜘蛛の触手を刀で防ぐが、触手の連打を防ぎきれず、壁際に追いつめられていく。  
頑丈な触手が、綱の刃をへし折る。  
さらに迫る土蜘蛛の触手を、折れた刀と小太刀で必死に防ぐ綱。

頼光「（焦り）いかが……いかがすればよい……」

必死に見回すと、天高く聳える大樹が目に入る。

大樹の先端と廃屋までの距離を瞬時に測った頼光。

頼光「……（やれる）」

鬼斬丸を鞘から抜くと、頼光は大樹に向けて素振り始める。

金時「（見て）何をやっているのだ、殿様は？」

惟光「……」

自分の気持ちを必死に刃へ籠める頼光。

鬼斬丸の刃が青白く光り、刃先が伸びる。

刃先が大樹の幹を掠る。

金時「スゲエ……何だ、ありゃ?!」

惟光「……殿、焦ってはなりません」

頼光は今一度、精神を鬼斬丸の刃先に集中させる。

頼光「（閉じていた目を開き）……!!」

青白く伸びた刃が大樹をぶった切る。

廃屋へ傾いていく大樹に向かって走り出す頼光。

飛び上がると、倒れていく大樹の幹の上を廃屋へ向

かい、走る。

廃屋の屋根をぶち破った大樹の先端を踏み台にし、

飛び上がった頼光は、そのまま土蜘蛛の巣穴へ飛び

込んでいく。

66・土蜘蛛の巣

巣穴の入口に追いつめられた綱は、傷だらけだ。

両腕・両足を押さえ付けられた綱の顔面に迫ってくる土蜘蛛の牙。

綱「(クツ……もう、ダメか……)」

そこへ地上から飛び込んできた頼光の鬼斬丸が、土蜘蛛の脳天を突き貫く。

断末魔の咆哮を上げ、活動を停止させる土蜘蛛。

頼光「大丈夫か……綱」

綱「殿……借りができ申したな」

頼光「ふん……かような時でも口の減らぬヤツじゃ」

綱「……(ハツとし)殿ッ！」

死んだと思った土蜘蛛の鋭い触手が動き、鬼斬丸を手にした頼光の右腕を刺し貫き、巢の奥へ引きずり込もうとする。

## 67・地上

糸に絡み取られ、動けない惟光と金時。

頼光が大樹を切り倒したことで起きた摩擦が、火を生み出していた。

火が蜘蛛の糸を溶かしていた。

それを見た惟光、呪文を唱え、全身を青い炎が包む。溶けていく蜘蛛の糸。

## 68・土蜘蛛の巢

土蜘蛛に振り回される頼光。

追いかける綱。

巢穴へ滑り込んでくる惟光と金時。

綱「遅いぞ、お前たち」

惟光「殿ッ」 金時「これは如何ッ」

刀を抜く惟光と背中の鉞を手にする金時。

それに綱を加えた三人は、土蜘蛛の八本の足を次々と斬り落としていく。

胴体を支える足を失った土蜘蛛は地面の上でジタバ

夕する。

綱「殿ッ」

突き刺さった触手を斬り落とした頼光は、力を解放し、土蜘蛛にトドメを刺す。

断末魔の咆哮を上げ、完全に絶命する土蜘蛛。

その場に片膝をついてしまふ頼光に、綱たちが駆け寄ってくる。

頼光「何とか…倒せたな…（笑う）」

## 69・燃えさかる廃屋

惟光「行き倒れた旅人や、戦で傷ついた落ち武者…土蜘蛛はそうした者たちの血肉を喰らうだけではなく、その者たちの憎悪や無念をも喰らっていたのでしょうか」

頼光「世の乱れが、あのような化け物を生み出したのじゃ」

炎をじっと見つめる頼光たち。風が駆け抜けた。

## 70・旅立ちの朝

頼光たちを見送りに来ている村人たち。

母との別れを惜しむ金時。

八重桐「…よいか、そなたは頼光様に付き従い、しっかりと御守りするのじゃ」

金時「…はい」

馬に上がり、騎乗の頼光たちのもとへ参る。

八重桐と村人たち、頼光に対して深々と頭を下げる。

## 71・旅をする頼光たち

足柄峠の方を淋しげに見ている金時に、

綱「何じや、金太郎。母上がもう恋しゅうなったのか？」

金時「ちッ…違うわ」

「金太郎、母恋しきや〜♪」と即興の歌を作り、茶化す綱を追いかけていく金時。

## 72・山間にある沢(夜)

野宿をしている頼光たち。

雑炊を啜っている金時のもとへ来る頼光。

頼光「金時、綱の無礼を許してやってくれ」

金時「殿様には済まぬが、ムシの好かぬヤツじゃ」

頼光「綱はのう…幼い頃に、流行り病で父と母を亡くしているのよ」

金時「(えっ?)」

頼光「…だから、別れを惜しむ相手がおるそなたが羨ましいのだ」

金時は徐に立ち上がると、離れたところで弓の手入れをしている綱にいきなり抱きつく。

綱「何じゃ…気持ちの悪い。放せ、放せッ」

二人の様子を苦笑して見ている頼光と惟光。

## 73・大江山・酒呑童子の砦

「血の池」より這い出てくる酒呑童子。

傷は完全に癒えている。

茨木童子「(迎え)麓に帝の軍が来ております」

酒呑童子「そうか…では、挨拶をせねばな」

茨木童子「(クスツと笑い)血が降りまするか?」

酒呑童子「(ニヤリとし)たっぷりとな」

## 74・大江山(夜)

崖下に妖魔討伐の軍が陣を敷いている。

酒呑童子と武者姿の邪鬼が崖上より攻めてくる。

「敵襲く敵襲じゃあ〜」

慌てふためく陣営を蹴散らしていく酒呑童子。

酒呑童子「よう聞け都の者どもッ、よもや忘れたとは言わせぬぞ。

ワシを地の底へ埋め、初めから無きものとしたつもりでも、ワシは地の底より這い出した。地の味と臭いは憎悪の証。そして、

我こそが真の統治者なのだッ」

怒りと憎悪が酒吞童子を紅蓮の炎に包み込む。

## 75・藤原兼家邸

報告を受けた兼家の手から碁石がこぼれ落ちる。

兼家「酒吞童子がかようなことを……」

道長「(笑い)真の統治者とは……妖魔如きがどこまでつけ上がるつもりか」

兼家「(眩くように)酒吞童子は……まさか……!」

道長「父上……ここは、やはり頼光を……」

兼家「言うなッ!更なる援軍を大江山へ差し向けるのじゃ」

そこへやって来る安倍晴明(変装した袴垂)。

晴明「至急、右大臣様にお報せしたきことがございます」

兼家「何事じゃ?」

晴明「酒吞童子の狙いは内裏にございます『八咫鏡(やたのかがみ)』かと、存じます」

兼家「八咫鏡、だと?……まさか、黄泉比良坂をッ!」

晴明「げにも」

道長「晴明、黄泉比良坂とは如何なる?」

晴明「あの世とこの世を結ぶ扉のことにございます。そして、その扉を開ける鍵となるのが、八咫鏡なのです」

兼家「黄泉比良坂が解放されたならば……帝の御世は終わる」

道長「……」

晴明「八咫鏡を移し申し上げるには、それを納めている内侍所(ないしどころ)の結界を解かねばなりません」

兼家「結界を解く呪文は……御上の詔(みこと)のり)であったな」

晴明「さようでございます」

兼家「判った。かような状況なれば、出雲に移し申し上げるがよからう。さっそく、御上に奏上致そう」

## 76・同・透渡殿(とうとでん)

晴明と保子がすれ違う。

保子「(清明に声をかけようとするが)……」

清明「(深々と頭を下げ、先を急ごうとする様子)」

保子「(ハッとする)」

透渡殿の下を流れる小川に、清明が映っていない。

清明に疑惑の眼を向ける保子。

### 77・内裏(翌日)

御簾の向こうに鎮座する帝が短冊に詔を吹き込むと、結界を解く呪文が浮かび上がる。

清明へと譲渡される短冊。

清明「(頭を垂れ、ほくそ笑んでいる)」

### 78・兼家邸・保子の部屋

卜部末武に宛てた手紙を書き終わった保子は、

保子「(傍らの女官に)コレを源頼光様の館に居られる卜部末武殿に届けるのじゃ」

受け取った女官は保子の部屋から下がっていく。

一人になった保子は衝立の裏へ入ると、身に着けていた桂や袴、小袖を脱いで衝立に放り掛ける。

### 79・温明殿(うんめいでん)・内侍所(夜)

傍らに倒れている検非違使たち。

清明は詔が吹き込まれた短冊を取り出し、呪文を唱える。

内侍所の結界が解け、清明は中へ入っていく。

八咫鏡に清明が手を伸ばそうとした瞬間、

声「何をしているッ」

清明が振り向くと、狩衣姿の保子が立っている。

八咫鏡を手にした清明が逃げようとするのを制止する保子は、

保子「そなた……清明殿ではないな？」

清明の懐からキラツと光る小太刀が突き出され、保子は後ろに立ち退く。

刀を抜いた保子は即座に清明の顔を斬りつける。

清明「くッ……（と顔を押しさえる）」

清明の顔が二つに割れ、袴垂が姿を現す。

保子「保輔……清明殿をいかがしたのじゃ？」

道摩法師「（現れ）もはや、この世にはおらぬ」

背後に立つ道摩法師と鬼同丸。

疾風の如くサツと動いた鬼同丸は保子に当身を食らわせ、気絶させる。

鬼同丸「清明も話し相手が欲しかろう（と、小太刀を喉に突き立てようとする）」

袴垂「（鬼同丸の手を思わず掴み）やめよ！」

道摩法師「まだ、情という下らぬものが残っていようとはな」

袴垂「ち、違う……ワシはただ……」

鬼同丸「けッ、愛しい姉様だからのお」

袴垂「（鬼同丸の手を離し）もう、姉とは思ってはおらぬ」

鬼同丸「淋しければ、したたり落ちる血を啜れば良からう（と小太刀を刺そうとする）」

……と、酒呑童子の声が響く。

酒呑童子（声）「やめよ、鬼同丸ッ!!その女子、何とも面白い。

我のもとへ連れて参れ」

鬼同丸「ケッ、童子様のご命令では仕方あるまい。（袴垂を見て）

残念だったな……」

袴垂「……」

八咫鏡と共に保子を連れ去っていく袴垂たち。

## 80・藤原兼家邸

道長からの報告を受ける兼家はへたり込む。

兼家「（八咫鏡が盗まれたことを知り）何ということだ……して、本物の清明は？」

道長「卜部末武に私宅を探索させたところ、死体を見つけたとのことにごさいます」

兼家「あの晴明が殺されたか：（と、碁笥をかき回す）」

道長「父上、もはや最後の希望は源頼光しかおりませぬ。多田源

氏の力を以ってしなければ、酒呑童子は倒せませぬ」

兼家「：：道長、そなたに話しておきたいことがある」

道長「如何なることでしょうか？」

兼家「我が藤原一門の存亡に関わることじゃ」

道長「：：：」

### 81・大江山・酒呑童子の砦

酒呑童子の御前に引き出された保子。

御簾の向こうに座る酒呑童子を筆頭に、茨木童子、

道摩法師、鬼同丸、そして袴垂が保子を囲む。

酒呑童子「そなた、帝の心を射抜いたそうだな？その顔、じつくりとワシに見せよ」

御簾が上がり、保子のもとへ近づく酒呑童子。

顔半分を覆っていた仮面を取ると、素顔が露に。

保子「：：：！！」

酒呑童子「（微笑み）ワシの顔を見るは、初めてではあるまい」

### 82・保子回想（嵐山の森林・小滝の畔）

叢から飛び上がる野鳥の鳴き声。

水浴びをしていた保子が目撃する。

目と目。保子と見つめ合うのは：：：帝である。

道長（声）「そは、誠にございますか？」

### 83・藤原兼家邸

兼家「天の気まぐれと呼ぶには、あまりに残酷な巡り合わせであった」  
「」

道長「酒呑童子は：：御上の兄君：：」

兼家「双子のな：：最も、目も当てられぬほどの容貌であったが」

84・二十年前・大江山の山中（冒頭のシーン）

武者「鬼を……鬼を討ち取ったぞツツツ！」

その光景を木陰に隠れた半部車（はじとみぐるま）の覗き窓から見つめる貴族がいる。ピカツと光った雷によって、それが兼家だと分かる。

85・大江山・酒呑童子の砦

髪に隠れた顔半分をむき出しにし、保子に見せる酒呑童子。

顔半分が奇形で、眼が魚のように飛び出している。

酒呑童子「ワシは一度死んだ。……されど、邪鬼として甦ったのじゃ。（哀しく微笑み）初めから邪鬼として生まれれば、かような恨みを抱かずに済んだかもしれぬものを」

保子「……」

86・藤原兼家邸

道長「先帝との密約……にございますか？」

兼家「出生の秘密を墓場まで持つていく……その代わりとして、藤

原一門の繁栄が約束されたのじゃ」

道長「……」

兼家「酒呑童子は必ず討たねばならぬ。それが御政道のため、ひいては我ら藤原一門を守ることになるのじゃ」

道長「……頼光を、呼び戻しますか？」

兼家「八咫鏡を盗まれた今となつては……致し方あるまい」

87・大江山・酒呑童子の砦

酒呑童子「ワシを葬った内裏や都の貴族たち、そやつらが支える

この国を、ワシは叩き壊す。（刀を手にし）あの世とこの世の境目を破り、ワシが帝として新しき世に君臨してやる。それが、

ワシが本来授かるべき正当な権利なのだ」

保子「…下らぬ」

茨木童子「そなた、童子様に対して何と無礼なッ」

保子「結局、お前も権力闘争に明け暮れる都の貴族たちと変わりはせぬ」

酒呑童子「いや、違う。ワシがこれから君臨する新しき世を間近で見れば、考えも変わろうというもの」

保子「殺さずにいて良いのか？…寝首を搔くかもしれぬぞ」

酒呑童子「(笑い)面白き女子よ。さすが、ワシの弟が見初めただけのことはある」

茨木童子「目障りじゃ。(鬼同丸に)…さつさと牢にぶち込んでしまおうのじゃ」

連れて行かれる保子に憎悪を向ける茨木童子。

みるみるうちに夜叉へと変貌していく。

茨木童子「(酒呑童子に)殿、なぜあの者の首を刎ねぬのです？」

酒呑童子「茨木、酒を注げ」

茨木童子「(酒呑童子に継り)これだけはお忘れなきよう。殿の寵愛を受け止められるのは、この世でもあの世でも茨木だけなのです」

酒呑童子「…そう、怒るな。ワシはあの女子が欲しいわけではない。我が弟が欲した女子であるから、手元に置きたいのじゃ」  
茨木童子「(夜叉から人の姿へと戻っていく)……」

## 88・同・地下牢

鬼同丸に牢へ放り込まれる保子。

ゴツゴツした岩に囲まれた牢内の片隅に池田中納言の娘、夕子がいる。

夕子「(気づき)そなたは…藤原の男姫殿ではござりませぬか？」

保子「姫様、ご無事だったのですね。他の方々は？」

夕子「…皆、生贄にされてしまいました」

保子「……………」

夕子「…私だけは儀式の人柱として残されたのです」

保子「…儀式？」

夕子「黄泉比良坂を開く……とか、そう申しておりました」

天井を見上げる夕子。

岩の割れ目から微かであるが、月が見える。

夕子「次の満月に、その儀式が執り行われるとのこと」

保子の袖口から紅葉の葉がこぼれ落ちる。

夕子「……アラ、もう秋が来ているのですね。そういえば、今年は

まだ紅葉狩りに出掛けていませんわ（と笑う）」

保子「（戸惑いつつ）……とにかく、ここから逃げ出さねば」

夕子「……歌が思いつかぬのです」

保子「？」

夕子「ここから連れ出され、命を絶たれた者たちの悲鳴や断末魔

の聲が邪魔して、歌が思いつかぬ（身体が震え、泣く）」

震える夕子の身体を抱きしめる保子。

保子「必ず助けが参ります。……頼光様が来てくれる」

## 89・相模国・湯治場

鳥の式神が碓井惟光のもとへやって来る。

その報せは卜部末武からのものだった。

手にした惟光は頼光のもとへ向かう。

## 90・同・温泉

頼光・綱・金時の三人が温泉に入っている。

金時「殿、腕の傷は如何にございますか？」

頼光「（腕を上げ）ホレ、この通り……大分癒えたわ」

金時「某が案内仕った湯の効能、偽りではございますまい」

綱「あまり得意げになるな。そなたが掘ったわけではあるまい」

金時「何をッ……コレでも喰らえ（と湯を綱にかける）」

綱「コレ……何をするッこのお……（と金時に湯をかける）」

頼光「やめよッ……御辺らは童か？（と苦笑する）」

惟光「（来て）殿ッ、卜部殿から報せが参りました」

頼光「何……末武から？」

湯を掛け合っていた綱と金時の手が止まる。

### 91・湯治の宿

書状を読み終えた頼光は、目を瞑って熟考する。

頼光から書状を受け取った綱、金時、惟光も読む。

綱「殿ッ」 金時「殿様ッ」 惟光「殿ッ」

頼光「（目を見開き）都へ戻るぞ」

綱「ははあッ」 金時「おう」 惟光「（頭を垂れ）」

頼光「今度こそ、酒呑童子と決着をつけねばな」

### 92・騎乗の頼光ら（夜）

暗闇のなかを駆け抜けていく頼光たち。

土煙を上げ、一路都へ向かうのだった。

### 93・大江山の麓（昼）

帝の軍勢と邪鬼たちが戦っている。

先頭に立つ鬼同丸は激しい戦闘のなか、武者たちの首を次々と跳ね飛ばしている。

### 94・酒呑童子の砦・地下牢

忍んで来たのは、茨木童子である。

小太刀を手にした茨木童子の気配に気づいた保子は夕子の盾となり、彼女を守る。

茨木童子「憎らしいそなたの顔をズタズタにしてやりたい」

保子「……………」

茨木童子「両手・両足を切り刻み、心の臓をえぐり出したい」

保子「……………」

茨木童子「殿の身も心も…ワシのものじゃッ」

夜叉に変貌した茨木童子が牢をぶち破り、手にした小太刀を保子に振りかざそうとした時、袴垂がその腕を掴む。

茨木童子「放せ、放さぬかッ：この裏切り者ッ」

袴垂「某、童子様や貴方様を裏切る気など毛頭ござらぬ」

茨木童子「なれば、ワシの思いを遂げさせよッ」

袴垂「童子様は、すべてご存知なのです」

茨木童子「：殿が？」

袴垂「申し付けられたのです、貴方様を見張るようにと：」

茨木童子「殿が：この私を：」

茨木童子の手から落ちた小太刀を手にした保子は、

保子「(夕子に) さあ、早く：(手を引いて)」

袴垂「逃がさぬ(と刀を抜く)」

保子の小太刀と袴垂の刀がぶつかり、火花が散る。

保子「(袴垂と対峙し) 姫様、お逃げ下さい」

夕子「はいッ(と駆け出す)」

追いかけようとする袴垂を防ぐ保子。

袴垂「そこを退いて下され、姉上」

保子「誰が姉じゃ：この物の怪めッ」

袴垂の繰り出す刀を小太刀で受け止める保子。

その拍子に倒れた保子は地面の土を手にすると、袴

垂に目潰しを喰らわせる。

袴垂「ぐわあ(と目を押える)」

その隙に、保子は夕子の後を追う。

## 95・同・滝の頂上

岩の裏手は絶壁となり、水が勢いよく滝壺へと流れ  
ている。

行き止まってしまった保子と夕子。

袴垂、茨木童子、武者姿の邪鬼が追いかけてくる。

保子「姫様：私にしっかりと掴まって下さい」

夕子「どうするのです」

保子「飛びます」

夕子「(怖くて) 嫌じゃ」

保子「大丈夫：(見つめ) 私を信じて下さい」

夕子「(保子の目を見つめ、そして頷く)」

滝壺に向かって飛び上がる二人。

茨木童子「逃がすかあ（と懐から複数の小太刀を投げつける）」

茨木童子の投げた小太刀の一つが保子の胸に命中してしまふ。

それと同時に駆けて来た袴垂が夕子の腕を捕まえ、  
砦の方へ引き戻してしまふ。

胸に小太刀を受けた保子はそのまま滝壺へと落下していくのだった。

茨木童子「（クスツと笑い）これでは、助からぬな」

袴垂「……………」

## 96・大江山の麓（夜）

帝の軍は全滅し、生き残った兵士たちが次々と敗走している。

そして、空には真っ赤な満月が昇ろうとしている。

## 97・酒呑童子の砦・玉座の間

道摩法師、鬼同丸、袴垂が玉座の酒呑童子に傳く。

茨木童子は玉座に続く階段の下に伏している。

玉座から茨木童子を睨みつける酒呑童子は、

酒呑童子「茨木：なぜワシに背いた？」

茨木童子「（顔を上げ）背いてなどおりませぬ。私はただ…怖かったのです。殿の御心が私から離れてしまうことに」

酒呑童子「何を申すか（玉座から降りてきて）そなたはワシにとつて、無くてはならぬ大切なモノなのじゃ（と抱き寄せ）」

酒呑童子は手にした大太刀でいきなり茨木童子の身体を貫く。

茨木童子「（驚き）?!」

酒呑童子「済まぬな、茨木。黄泉比良坂を解放するには、この世からは人柱、あの世からは血の生贄が必要なのじゃ」

茨木童子「私は生贄に？」

酒呑童子「そうじゃ。…………憎いか、このワシが？」

茨木童子「憎い！そして、殺したいほど、貴方が愛おしい！」

酒呑童子「腹の底から怒れ！心の底から憎め！それが糧となる」

滴る血は溝を這い、中央に据えられた漆黒の石室に  
飲み込まれていく。

酒呑童子「茨木、我が大望の礎となってくれ」

茨木童子「嬉しゅう……ございます。今まで受けた……どんな愛撫  
よりも……殿の情けを……胸に……感じ……ま……す……る（絶命）」

絶命した茨木童子の身体は崩壊し、血と共に石室に  
吸い込まれていく。

酒呑童子「とうとう、我が野望を実現させる時が来た！」

石室に八咫鏡が据えられ、黄泉比良坂を解放する儀  
式が始まろうとしていた。

夕子が石室に道摩法師の手で寝かされると、夕子の  
身体が沼に沈むように石室の中へ消えていく。

透けた石室の中では、漂う夕子の姿が見られる。

道摩法師が呪文を唱えると、八咫鏡が不気味な光を  
放ち、石室を包み込む。

地が揺れ、そして裂け、その亀裂から次々と霊魂が  
飛び出してくる。

血の池からは悲鳴に似た声と共に無数の腕が突き出  
してくる。

呆気にとられる鬼同丸と袴垂。

霊魂の光に包み込まれた酒呑童子が咆哮を上げ、

酒呑童子「我が御世の始まりじゃあああ！」

## 98・大江山の麓

漆黒の雲が空を包み、大江山から噴き出した光の柱  
が八つに分離し、天駆ける龍の如き装いを見せる。

八つの光は八方へうねる様に倒れ、地表に地割れを  
起こす。

## 99・平安京

漆黒の雲が放つ稲妻、地震、地割れによつて内裏や貴族の屋敷、羅城門が次々と崩壊していく。大路は逃げ惑う人々で溢れ、貴族の牛車が暴走し、あちこちで横転する。

#### 100・馬を走らせる頼光たち

ポタ：…ポタ：…と、雨粒が落ちてくる。

降ってきたのは、血のように赤い雨だった。

金時「うわあ、なんだこりゃ」

突然の地震が一同を襲う。

パニックになった馬を宥め、立ち止まる一同。

赤い雨は激しさを増す。

惟光「（頼光に）殿ッ、西の空をご覧下され」

赤く染まる西の空を見つめる一同。

綱「この世が終わるようじゃ…」

頼光「終わりになどさせぬ。…よいか、行くぞッ」

綱・惟光・金時「おおお」

大江山へ向けて走り出す頼光らが乗った馬。

#### 101・大江山の麓

兵士や邪鬼の屍が無数に転がり、激しい戦闘が行われた様子が伝わってくる。

惟光「まさに地獄絵図でござるな…」

従者を連れた武者（地方の豪族）が逃げてきて、

豪族「（慌てて）御辺らも早う逃げよ。この世はもう終わりぞ」

さっさと逃げていく武者と従者たち。

霧の先から聞こえる馬の蹄に、身構える頼光たち。

現れたのは武装した卜部末武であった。

頼光「爺い、爺いではないか？」

末武「殿お：…お待ち申し上げておりました」

頼光「戦況は如何に？」

末武「友軍はほぼ壊滅し、敗走しております」

頼光「……のようじゃな？」

末武「ここは危のうございませう。さつ、ひとまず森の中へ」

末武に従い、頼光たちは森の中へと入る。

## 102・森の中

川の畔にやって来た頼光たち。

喉が渴いた金時は馬から飛び降り、一目散に川の中へ顔を突っ込み、がぶがぶと水を飲み始めるが、川の淵には武者の死骸が転がっているのに気づき、

金時「ぎやああああ（と飛び退く）」

綱「（馬を降り金時の元へ）まったく……何をやっているのだ」

頼光「……（惟光に）さて、これからどうすれば良い？」

惟光「すぐさま酒呑童子の砦に侵入し、黄泉比良坂を封じねばなりませんまい」

末武「さりとて、砦は思いのほか強固。数多の軍勢を以ってしても、容易に突破できませんんだ」

頼光「何か手は……打つ手はないものか？」

綱「（叫んで）殿ッ……殿ッ」

綱が川の淵に引つ掛かっていた保子を救い上げ、頼光のもとへ連れてくる。

頼光「（ハッと）や……保子」

## 103・気がつく保子

目の前には、頼光や仲間たちがいる。

頼光「……保子……気がついたか？」

保子「頼光……様。（はね起き、頼光に抱きつく）」

頼光「保子……よう生きていた（抱きしめる）」

惟光「保子様、酒呑童子の砦から如何にして脱出されたのです？」

保子「砦の裏手が絶壁で、滝が流れています。（指さし）この川の上流にその滝がございます」

綱「……なれば、そこから砦に潜入できますな」

保子「（頼光に）私が案内致します」

頼光「身体は……大事ないか？」

保子「……はい。夕子様をお助けせねば」

末武「生きておられるのですか？池田中納言様の姫が？」

保子「（頷く）」

頼光「よし……皆の者、行くぞ」

末武・綱・惟光・金時「おう」

馬に乗った一同は川の流れに沿って、上流を目指す。

頼光の馬に乗った保子は胸に頼光の鼓動を感じ、そして頼光は背に保子の温もりを感じる。

保子は茨木童子に受けた刃の傷で染み出てくる血を必死で隠していた。

#### 104・大滝の麓

絶壁の頂上には、酒呑童子の砦が聳えている。

その絶壁を登っている頼光たち。

頼光「（掴んだ岩が外れ）?!」

バランスを崩し落ちていく頼光。

一同「!!」

頼光の手を綱が掴む。間一髪である。

頼光「（苦笑し）何時ぞやの貸し、返して貰うたな」

綱「かようなこと……返したうちに入りませぬ（と微笑む）」

#### 105・大滝の頂上・酒呑童子の砦

鍾乳洞のように歪み、曲がりくねった通路を保子の案内で進んでいく頼光たち。

……通路が開け、広場のような場所に出てくる。

どちらへ進んでよいか分からなくなるほど、四方の至るところに洞穴の入口がある。

頼光たちが広場に入ったのを待っていたのか、洞穴の至るところから武者姿の邪鬼と鬼同丸が現れる。

鬼同丸「来たな、頼光ッ。ここをお前の死に場所にしてやるッ」「殺せッ」という鬼同丸の合図で頼光たちに襲いかか

る邪鬼ども。戦闘が始まる。

両手に鉞を持った金時は、鬼同丸に立ち向かう。

次々と繰り出す金時の鉞をかわす鬼同丸。

金時「クソお：ちよこまかと」

鬼同丸「（避けながら）力任せでは勝てぬぞ、木こり侍ッ」

末武「（邪鬼と切り結びながら頼光に）殿ッ、ここは某と金時に  
お任せ下され。早う、酒呑童子のもとへ」

金時「殿様、雑魚は引き受けた。（綱に）殿様を頼むぞ」

鬼同丸「誰が雑魚かッ（と金太郎に刃を向ける）」

綱「後を頼むぞ、金太郎ッ（と邪鬼を蹴散らし、進路を作る）」

惟光「さあ、殿ッ（頼光の殿≪しんがり≫につく）」

酒呑童子の玉座へと向かう頼光、保子、綱、惟光。

金時「（末武と背中合わせに）大丈夫かよ、爺さん」

末武「まだまだ：老いぼれてはおらぬッ：よいか、ここから先  
へ一匹たりとも通すな」

邪鬼と鬼同丸に立ち向かっていく金時、末武。

## 106・酒呑童子の砦・玉座の間

たどり着いた頼光、保子、綱、惟光を道摩法師、袴  
垂が迎え撃つ。

綱「（袴垂と戦いながら）殿：酒呑童子のもとへ」

頼光「（保子に）参ろう」

保子「はい」

袴垂「させるかああ（阻止しようとしたところへ綱）」

綱「御辺の相手は、このワシじゃ」

袴垂「倒せるかな、このワシを？」

刀と刀がせめぎ合い、火花を散らす。

## 107・惟光と道摩法師

対峙する二人。道摩法師は挑発の目的で、その姿を  
晴明へと変える。（以下の表記は道摩法師のまま）

惟光「（その挑発に怒り）晴明様の仇：貴様だけは決して許さぬ」

道摩法師「(笑い)恨みだけで、このワシは斬れぬぞ」  
惟光「元より承知よッ」

惟光が放った式神を道摩法師の放った雷が打ち落とす。その瞬間、刀を抜いた惟光が道摩法師の懐に飛び込んでいく。

惟光の刃を手にした杖で防いだ道摩法師は、

道摩法師「どうやら…恨みだけでワシを斬ろうとはしていないよ  
うじゃな。…さすが、晴明の愛弟子よ」

惟光「…(フツと笑いながら、一つの眼は道摩法師を睨む)」

### 108・同・石棺の前

にたどり着いた頼光と保子の前に立ちはだかる酒呑童子と邪鬼たち。

酒呑童子「再び会えるのを待ちかねていたぞ、源頼光」

頼光「ワシとて同じ心持ちじゃ。(保子に太刀を渡し)石室まで  
行けるか？」

保子「もちろん…今の私には『武士』の血が滾っておりませ故  
互いに見つめ合い、覚悟を決める頼光と保子。

いつせいに飛びかかる邪鬼を斬り捨てながら石室へ  
一直線に駆けていく保子。

頼光「(鬼斬丸に念じ)父上…晴明…某を御守り下され」

酒呑童子「いざ、参るぞッ。源頼光」

振り下ろされる酒呑童子の大太刀を下から救い上げるように受け止めた頼光の鬼斬丸は青白い炎を帯びている。

酒呑童子「(嬉しそうに)腕を上げたな」

頼光「今度は此方から参るぞ」

受け止めた酒呑童子の大太刀を弾くと、鬼斬丸を酒呑童子の胴体へ次々と繰り出していく。

### 109・【金時】 対 【鬼同丸】

力と力が互角にぶつかり合っている。鬼同丸の妖気

が盛り上がり、金時をはじき飛ばす。

金時は手にした鉞の一つを落としてしまう。

金時「…クツ（手にした鉞を鬼同丸に投げる）」

半円を描きながら飛んでいく鉞を、寸での間隔で避けた鬼同丸は、

鬼同丸「…（不敵に笑い）その首貰ったあああ（と向かう）」

鬼同丸の刃が金時の首に迫ろうとした瞬間、ブーメランのように反転した鉞が鬼同丸の胴体を貫く。

鬼同丸「ぐはぁ（吐血する）」

拾い上げた鉞で、鬼同丸の首を吹き飛ばす金時。

金時「…勝った。（末武の方を向き）勝ったぞ、爺さん」

切り倒した邪鬼の死骸の中に佇んでいる末武は、手にした槍で身体を支えたまま、絶命している。

金時「（笑みが消え）爺さん…」

「カツ」と見開いた末武の眼を閉じてやった金時は、決して振り返らず、頼光たちのもとへ向かう。

#### 110・【綱】 対 【袴垂】

舞い上がった綱と袴垂の刃が、宙でぶつかり、火花を散らす。着地した綱がよるめいた隙をつき、壁を蹴った袴垂が綱に向かっていく。袴垂の刃が綱の肩を切り裂く。

綱「ぐほお（と地面に倒れる）」

刀を向けた袴垂と、それを睨む綱。

綱「…殺すなら、一思いにさつさと殺せ」

袴垂「殺さぬ。…（ニヤツとし）その方が、お前には苦痛になるであろうからな…（刀を納め、酒呑童子のもとへ）」

綱「おい、ふざけるなッ！（地面を拳で叩きながら）畜生…」

畜生「…ちくしょうめ！」

#### 111・【頼光】 対 【酒呑童子】

酒呑童子の次々と繰り出す大太刀の攻撃に、押され

ている頼光。鬼斬丸の力を蓄え、一気に仕掛けるつもりなのだ。

112・【惟光】 対 【道摩法師】

分身の術を遣う道摩法師に、惟光も分身の術を遣って対抗する。何人もの惟光と道摩法師が戦い、その残像をお互いに消し飛ばす。

道摩法師「(惟光の本体を見極め)：：死ねッ(杖を突き出す)」  
：：が、それは惟光ではなく、紙人形だった。

道摩法師「(しまった?!)」

空中から飛び降りてきた惟光が、道摩法師を一刀両断。額がパツクリと割れ、元の姿に戻ったと同時に血が噴き出す。

惟光が虚空で切った五芒星が、道摩法師の胴体をバラバラに粉碎する。

惟光「すべて某の私怨が成した所業。：：お許し下さい、晴明様」  
惟光が振り向き様、やって来た袴垂に蹴散らされ、地面に倒れる。

頼光と酒呑童子の対決を尻目に、一直線に石棺の保子を目指す。

113・青い閃光を放つ鬼斬丸

が酒呑童子に繰り出される。頼光の鬼斬丸を大太刀で受け止める酒呑童子だったが、頼光の力は弱まることなく、むしろ増大していく。

114・石棺の前

刀で八咫鏡を粉碎しようとした保子に、袴垂が小太刀を投げつける。肩口に刺さり、のけ反った保子は必死に態勢を戻すと、その小太刀を引き抜き、八咫鏡を粉碎する。けたたましい悲鳴が響き渡り、黄泉

比良坂の裂け目がどんどん縮んでいく。石室が融解し、放り出された夕子を、惟光が抱きかかえる。

#### 115・鬼斬丸を防ぐ酒呑童子

頼光の鬼斬丸はヒビの入った酒呑童子の太太刀を貫き、鎧ごと酒呑童子を貫く。光の刃とともに吹き飛ばされてしまう酒呑童子。そして、頼光は鬼斬丸を手にしたままその場に崩れ落ちる。

頼光「……………（勝った）」

負傷した綱に肩を貸した金時がやって来て、

金時「殿様あゝ」

綱「やりましたな」

頼光「うむ。……（いないので）末武は？」

金時「（肩を落とし、首を横に振る）」

#### 116・保子と袴垂

保子「決着をつけようぞ、袴垂」

袴垂「望むところ」

同時に動いた二人の刀がぶつかる。

袴垂が保子の刀を受け止める。保子はその刀を刃に

沿って根元へ動かし、袴垂の心臓を突く。

袴垂「ぐはぁ（崩れ落ちる）」

戦いは終わった。保子は倒れた袴垂に近寄り、

保子「どうやらワシは、人であることを捨ててしまったようじゃ」

袴垂「……姉上、それは違います。某が捨て切れなかったのでご

ざいましょう、人の心というものを……………」

絶命する袴垂。その骸を抱きかかえようとした保子だったが、袴垂の骸は灰となり、保子はその灰を掴むことしかできなかつた。

#### 117・瀕死の酒呑童子

酒呑童子「このワシが……まさか……かような事になろうとは……  
すると足元に伝ってきた黒い水が突然うねり、酒呑  
童子の身体にとり憑く。

酒呑童子「い……茨木。生きていたのか？」

酒呑童子の奇形の顔半分が茨木童子の顔に変わり、  
茨木童子「童子様あ……私はもうく離れませぬ」

茨木と融合していく酒呑童子は、みるみるうちに巨  
大化し、四足の妖魔へと姿を変える。

綱「(気づき) 殿……酒呑童子が」

金時「なッ……何じゃこりやあああ」

咆哮を上げた妖魔は、傍らにいた保子をいとも簡単  
に吹き飛ばしてしまう。

頼光「保子おおお」

宙に浮いた保子の身体はボロ切れのように地面に叩  
きつけられる。

妖魔「(茨木の声で) ハハハハ、ほんに忌々しい女子よ。(酒呑  
童子の声に変わり) 頼光く次は貴様だあ」

突進してくる妖魔の攻撃を交わすため、散る頼光た  
ち。妖魔はその巨大な身体を持て余しているように、  
前脚を振り回し、砦の壁や天井を破壊して暴れる。

頼光「(綱たちに) ワシの鬼斬丸に、皆の力を込めるのじゃ」

惟光「あの化け物を倒すには、それしかござりませぬな」

綱「御意」 金時「おう」

頼光の手にした鬼斬丸のもとへ集まる綱、惟光、金  
時に狙いを定めた妖魔が突進してくる。

頼光たちの力が、青白い光を放つ鬼斬丸に注入され  
ていき、その輝きが増していく。

頼光「これで終わりじゃああああ」

妖魔の開いた口が頼光たちを飲み込もうとした瞬  
間、鬼斬丸が放った光の刃が妖魔の胴体を真っ二つ  
に切り裂く。閉じかけていた黄泉比良坂の裂け目に  
飲み込まれていく妖魔は、断末魔の悲鳴(茨木と酒  
呑童子の入り混じった声)を上げ、裂け目に吸い込  
まれ、消滅する。

：と同時に、砦の崩壊が始まる。

落石を避けながら保子の身体を抱いた頼光は、

頼光「保子：さあ、都に帰ろう」

家臣たちと共に砦を脱出する頼光。

### 118・崩壊する酒呑童子の砦

### 119・大江山の麓

保子は大量の出血をしていて、手当てを施そうとした惟光も首を横に振る。

頼光「(傍らに寄り添い) 保子：」

保子「頼光様：最後に：お話したきことがございます」

頼光「何じゃ：(と口元に耳を近づけ)」

保子が話す言葉に、みるみると表情を変える頼光。

頼光「そは：まことか？」

保子「(コクツと頷き)：間違いありません。私は：」

頼光「もう、良い。それ以上喋らずとも良い」

保子「あの夜の夢のこと：決して忘れませぬ」

頼光「ワシもじゃ」

保子「(微笑み、そして目を閉じる)」

保子から命が消える。残された骸を頼光は何も言わず抱きしめるのだった。

### 120・藤原兼家邸

濡れ縁に立った兼家と道長に、武者姿で庭先に伏している頼光が、

頼光「恐れながら、右大臣様の御耳にお入れしたきことがござります  
ます」

兼家「何じゃ？：申してみよ」

頼光「ハハア。実は酒呑童子の出生に関するにござります。

酒呑童子は恐れ多くも：」

道長「(ギョツとし) 止めよ！その話はそれまでに致せ」

兼家「（頼光に）そなた、どういうつもりじゃ？」

頼光「（惚けて）どういうつもりも、某はただ、右大臣様に有りのままを、お話し致そうと思つたまででござります」

道長「そちは：我らを脅すつもりか？」

頼光「かようなつもりは毛頭ござりませぬ。某はこれからも末永く右大臣様にお仕えしたいだけでございます」

兼家「頼光：そなたも父と同じく喰えぬ男になつたのお」

頼光と兼家が目を合わせ、笑みを浮かべる。

兼家「源頼光という男、武士にしておくには勿体ない。そう帝に申し伝えよう」

頼光「ハハア。ありがたき幸せにござります」

兼家「これからも頼むぞ。我らの為に（基石を手で鳴らす）」

## 121・京・三条河原

郎党を率いた頼光が馬で道を行く。

頼光「（惟光に）意に添わぬことをした。このワシが、かような駆け引きをするようになるとは：」

惟光「それで良いのです」

綱「そうじゃ、殿はもう『若殿』ではないのですから」

頼光「さりとて、あまり気持ちのいいものではなかつた」

ふと、頼光が馬を止める。

三条河原の対岸では、貴族たちが酒宴を催している。

酒を呑み女たちが舞い、その狂宴の様子を頼光は訝しげに見つめる。頼光たちの足元、河原の辺には餓死した者たちの死骸が転がり、乞食たちが力なくしゃがんでいる。乞食の中には、多くの幼子も混じつていて、木の根を齧っている。

金時「酒呑童子を倒しても、この世は地獄のままじゃな」

頼光「なれば、我らがそれを変えるまでじゃ」

郎党一同「：：：」

頼光「されど、今はまだその時にあらず。時が来るまで、我らは力を蓄え、それを受け継がねばならぬ。：その為なれば、ワシは意に添わぬことも、駆け引きも、躊躇いなくするつもりじゃ」

惟光「殿：・我らとて、気持ちと同じでございませう」

金時「その通り。駆け引き、大いに結構でござる」

綱「田舎侍が駆け引きなど、できるのかよ？」

金時「うるさいッ。ワシにだって、できるわいッ」

すると、いきなり頼光は手綱を引いて馬を走らせる。

綱「殿お？」 金時「何で?!」 惟光「……………」

## 122・馬を走らせる頼光

後ろから「殿々」と叫びながら馬で追いかけてくる

綱、金時、惟光の三人。

頼光「(馬を走らせながら)これから、ワシにどれほどのことができるものか：・見ていてくれ、保子」

頼光はその背に「保子」を感じている。

その温もりが砂塵のように頼光の背から散っていったとき、頼光の眼から涙が溢れてくる。だが、その涙を誰にも見せるものかと、頼光はがむしやらに馬を疾走させる。

その後を続く頼光の郎党たち。金時は「ワシが一番に殿様のもとへ参上仕る」と言えば、綱が「何の金太郎。一番はこのワシじゃ」と競い、惟光は苦笑しつつも馬を走らせる。

頼光とその郎党たちを乗せた馬は地平線の彼方を目指していくのだった。

終

【参考文献】

- 隴谷寿著 『源頼光 人物業書新装版』 吉川弘文館  
寺田 透著 『平安時代の物語』 福武書店  
高橋 昌明著 『酒吞童子の誕生、もう一つの日本文化』  
(中公新書 1081) 中央公論社  
大島健彦(校注) 『御伽草子集(完訳日本の古典49)』 小学館  
倉野憲司(校注) 『古事記』 岩波文庫  
佐竹昭広(ほか) 編集委員  
『新日本古典文学大系 今昔物語集』 岩波書店  
『日本文学古典大系 宇治拾遺物語』 岩波書店  
『衣食住に見る日本の歴史4 貴族と庶民のくらし  
・平安時代』 あすなる書房  
『日本の歴史4 揺れ動く貴族社会・平安時代』 小学館

